

三沢市立三沢病院での小児科実習を終えて

弘前大学医学部 5 年 石川智章

今季、小児科の実習は大学病院に続いて 2 回目(3,4 週目)であるが、三沢病院では大学病院とは全く異なった体験をすることができた。大学病院での実習では心臓グループに配属され、先天性心疾患で入院していた受け持ち患児を診察してレポートにまとめたほか、専門外来の見学や講義を中心に実習を行った。これに対し、三沢病院ではより一般的な小児科診療を体験した。

外来見学では、感染症、アレルギー、臍ヘルニア、便秘、先天性心疾患など、様々な患児をみることができた。疾患も様々であったが、それ以上に患児や保護者のキャラクターや背景も十人十色であった。先生が、新生児や乳児は成人と違って基本的に本当の事しか言わない(から難しくない)と仰っていたのは印象に残った。ただし、幼児や小学生になるとその言葉や行動における個性が強くなり、患児によっては扱いが難しそうに思われた。さらに、親御さんは子どもに関する様々な事柄について非常によく話し、時には患児の認識とは異なっている様子もあった。そのような時、患児と保護者それぞれの、どのような訴えをどれくらい重視するか考え、判断しながら問診するのは技術が必要であると思った。成人患者の診察の場合以上に、傾聴の姿勢や、患児と保護者のキャラクターをつかむことが大切であると感じた。また、患児は検査や注射の際に泣き叫んだり暴れたり抵抗するため、体や手足の固定が必要になる場合があり、小児科ならではの難しい問題であると感じた。

病棟実習では、肥満症で入院していた患児と院内の歩行や階段昇降、ジョギングなどの運動を行った。クリクラ学生の立場であるのに役割が与えられたのは嬉しく、また、元々子どもと話すのは得意ではなかったが、患児に声掛けを行って色々な話をする中で、苦手意識がなくなっていることに気がついた。

今回最も印象に残ったのは、医療的ケア児の訪問診療の見学である。前情報が与えられない状態で訪問したが、立派な門構えの大きな自宅で、リビングは巨大な子供部屋であり、3 台のベッドが並び、重い障害をもった 3 児が寝ていた。そこに複数の機関から多職種が来訪し、活発に処置やカンファレンスが行われていた。一家の中に同程度の重い障害をもった医療的ケア児が 3 人いることや、大きく綺麗な部屋、想像できる訪問診療の規模を超えていることなど、とにかく驚かされた。

最後に、三沢病院での実習では明るい挨拶が飛び交い、緊張感がありつつも朗らかな雰囲気の中で実習を行うことができました。このような貴重な場を設けてくださり、実習に関わってくださった先生方、医療職、事務職、その他スタッフの皆様、本当にありがとうございました。



実習期間：2026.8.17～8.28